

アトム年と 手塚治虫先生の 思い出

小学館クリエイティブ代表取締役・
評論家

うえのあきお
上野明雄

史上最高の観客動員記録を作った宮崎駿の劇場用アニメ「千と千尋の神隠し」が、昨年のベルリン映画祭グランプリ（金熊賞）に続き、今年度のアカデミー賞を獲得した。山村浩二のアニメ作品「頭山」が、フランスのアヌシー国際アニメーション映画祭で、クリスタル賞を得た。ゲームボーイのソフトから誕生したポケモンが、テレビアニメや映画になってアメリカを始め世界各国で大旋風を巻き起こしたのも記憶に新しい。少年週刊誌の「少年ジャンプ」が、昨年十一月に誌名もそのまま「SHONEN JUMP」としてアメリカで創刊され、好調に推移しているともいう。いまや日本のアニメやマンガやゲームなどのサブカルチャーが、世界中で大人気になっている。

二〇〇三年四月七日が「鉄腕アトム」の設定上の誕生日なので、今年はまだアトム年とされ、アトム関連イベントが賑やかだった。四月からは新作アニメのテレビ放映が始まり、ハリウッドでもCGを駆使した映画企画が本格化しているという。大学卒業後出版社に就職し、最初に配属された学年別学習雑誌で手塚先生の担当になった。以来、亡くなられるまでの二十年以上に亘っておつき合っていたいてきただけに、昨今の世界的な日本のサブカルブームに先駆的な役割を果たした手塚治虫先生の存在がますます大きく見えてくる。



初めてスタジオに伺ったときのことだ。わざわざベレー帽を取りに部屋に戻り、「手塚治虫です」と名刺を差し出ししながら、「私の担当をした編集者は、みんな編集長になっていきますから、がんばってください」とおっしゃった言葉を、つい昨日のことのように思い出す。

担当編集者にとっては、なにかとエピソードの多い先生でもあった。確か六〇年代末頃のことだ。新宿の紀伊国屋ホールで記者会見があると、お供することになった。記者会見というのは、大部分は原稿待ちの編集者の目をかすめて仕事場を抜け出す口実で、行ってみると映画の試写会だったこともある。先生ご指名の編集者だけが特権的にお供するので、もちろん他言無用だ。

その日は安部公房の新作「棒になった男」の公演だった。招待状を忘れた先生が開演間際の受付で「手塚ですが」と名乗るが、受付嬢たちは「どちらの手塚さんですか？」とまったく取り合ってくれない。イライラした先生が汗だくになって「安部くんは？」と聞くと、相手はますます不信感をあらわにするだけ。いまや世界の手塚治虫も、その頃はまだそんな状態だったのだから隔世の感がある。「安部先生のお友だちの、マンガ家の手塚治虫先生ですが、招待状を忘れたので」と説明して、やっと中に入れてもらった。その安部公房先生も手塚先生も、いまはもういない。

今年の春から、ある大学院で「サブカルチャー研究の方法と課題」というテーマで講義を始めた。手塚先生が戦時中に描かれた「幽霊男」や「勝利の日まで」から、「新宝島」や「ロストワールド」などの初期作品を再読したり、初の国産テレビアニメとなった虫プロ制作の「鉄腕アトム」を見直しながら、以前には気がつかなかった斬新な手法や卓越した想像力に改めて感服している。日本のマンガやアニメが世界を席卷するまでになった土台は、文字通り不眠不休でパワフルに活躍された手塚先生の偉大なる功績によって構築されたのだと、今更ながら思い知らされる。

（67年経済学部卒。野上暁の筆名で『子ども』というリアル、近刊『ファンタジービジネスのしかけかた』あのハリ・ポッターがなぜ売れた？』などの著作がある）